

新しい詩の声 2025 (第9回)・作品

〈最優秀賞〉

新里 輪

listen

ピアノ教室から柔らかいレースのような音が響き渡り、風に起こされたカーテンが膨らんでいる。めくられて、控えめな植物の、窓辺に置かれたサンスベリアの葉が、日差しの中に暖まっている。

空気は澄みすぎるほどで、隣町の防災無線さえ届いてきそうな、瑞々しく、日曜の午後だった。

冷蔵庫からトマトを出す。包丁を入れると綺麗に二つに分かれる。断面がポップアートみたいなデザインをしていて、あなたにもつい見せたくなった。写真に撮れば必ず損なわれる色彩があつて、私の瞳が映す景色を、そのまま転送できたなら。

ベランダで洗濯物を干していると、幼い頃に見た

祖母の、美しく伸びた背を思い出す。

肩甲骨を引き寄せてみると、一瞬、羽があるような気がした。

そして青空にすさがれる心地と、確かに胸を張って立てば、世界は少しだけ下になること。

シャツの皺をのばす手つきで、折り重なった心をひらき。垢のように溜まっていた陰翳は、光に晒されて消えていった。

鳥が白い雲へまっすぐに飛んでゆくのを見て、私はひとり

この静謐な時間に思うすべてをそのままあなたに手渡せたなら

何度も書き直しては

ついに送信することのなかった

書き損じのメッセージを腕いっぱい抱えて

(もう既に、隙間からこぼれてゆく)

言葉という淋しさにはにかみながら

今、あなたへ話しています

〔優秀賞〕

中村 あさみ

遠景

それは円く切り取られた景色の中にあつた

去年まで巢作りに使われていた民家は

ビルへの建て替えが決まった

そのことをまだ 南の燕は知らない

すでに取り外された玄関が何かを語るが

その唇の動きに気づくものはない

私の心は そつと近づいて

錆ついたドアノブを回した

中は森 霧が立ち込めている

だが 目を凝らせばそれは霧ではなく

森が消えかけているのだと知った

遠くで地響きが起こり

川上から濁流が押し寄せてくる

名の付くものはことごとく流され

この川で何が起こったのかを知っているのは

風に乗っていたトンボだけ

向こう岸では老婆が孤島を指さしている

鹿の群れが肩を寄せて震えていた

大きいのも小さいのも傷だらけで

真つすぐにこつちを見て来る

そしてみんな一斉に 啼いている 哭いている

私は慌てて銀の筒を下ろした

周りにはたくさんの私がい

同じように銀の筒を覗いている

何を見ているのか

何が見えてくるのか

何に見られているのか

どれもがただ立ち尽くし

影だけがどんどん伸びている

〈優秀賞〉

yellow

春の身体

骨が軋む程

寒かった季節を

乗り越えた先の

暖かさは

骨を

一本一本

解していく

解体されていく身体は

花の香りを纏って

再建されて

柔らかい

春の身体になる

春の身体になった人は

すぐわかる

良い香りがするからだ

そして冬の身体の人

動く度に

骨がざしざし音がする

そしてほのかに雪の匂いがする

春の身体

柔らかく湿った草木の匂い

程よい湿気を含んでいて

子供の頃の身体に戻ったみたい

きつとそれは

春の妖精まで食べたからだ

〈ジュニア賞〉

芳賀 堇

夜の三原色

ゴロゴロして左を見れば

夜の道路にお店のライト

頭の上を見たら

いつも落ち着くリビングの光色

ドアの下を見ると

リビングにたどり着くためのいつもの冒険

私のベットに全てかさなる

路色

暖色

冒色

私は嬉しくて眠れない

今日が色々あったこと

明日への道があることが

私の好きな希色

受賞のことば・受賞者略歴

●最優秀賞

新里 輪

〈受賞の言葉〉

この度は素敵な賞をありがとうございます。本当に嬉しいです。色々と投稿しては落選するたび、もうやめようと勝手に不貞腐れて眩き。それでも時間が経つとまた、結局何か書き始める。やっぱり認めてほしかったし、芸術や文学、詩作が好きでした。

最近、比喩というのは凄い発明だなと改めて思います。私固有の心身感覚について、苦しい、温かいなど事実を並べても、私のそれは伝わらない。だから私達は「〴〵のように」とか、比喩を使う。自分の抱える孤独を分かっている時、例えば「大海原に一人きりで浮かんでいるみたいだ」などなど……。

でもどれだけ言葉を尽くしても、言語感覚の天才でも、きつとほとんど伝えられない。どんな表現も、なにより言葉自体がそもそも、完璧にはないのだとさえ思っています。

では、伝わらないならそれは徒労か。懸命に生み出した比喩は無意味か。もちろんそんなはずはなく、比喩の力は、伝える伝わるではなくて、想像させることにあるのではないかと思うのです。私が今、「海に一人で浮かんでいるみたいに寂しい」と話しかける。あなたが耳を澄ましてくれた時、あなたはきつと「海に浮かぶ私」を想像する。

私の寂しさに、思いを巡らせている。分かる分からないではなくて、今、あなたが私のことを想う。そこに、二人が歩みようとする姿勢がある気がするのです。上手く言えないですが、これこそ比喩の本当の凄さではないのかと私は思っています。I tried ちょっと気取って英語にしてみました、聴いてほしいって、ほんとに、それだけなんです。

〈略歴〉

1999年2月生まれ。会社員。岡山市在住。

●優秀賞

中村あさみ

〈受賞の言葉〉

この度は第9回「新しい詩の声」優秀賞に選出頂き誠にありがとうございました。

「詩を読む」「詩を書く」というような世界があることを知ったのは私にとって大きな発見でした。様々な詩人の様々な作品を読みはじめると、詩の世界は途方もなく大きくて深いものだと感じました。薄く平たい紙に書かれた言葉が、詩として立ち上がる時、現れたのはナイルの星や沙漠、月曜日の理髪店に山村の廃屋など、それまで知り得なかった景色。時間軸は古代から未来まで自在で、人間について、自然について、自由と優しさについて語りかけてくれました。

このような感動が詩を書くきっかけになったのかもしれません。書きはじめると、自分はこんなふうに考えていたのかと、新しい自分を発見したような気にもなりました。

そして「詩を読んでもらう」というのは読み手

の貴重な時間を頂戴しているということ、一期一会かもしれないということ。本当に有難いと思います。これからもいろんなことに好奇心を持って詩作に臨んでいきたいです。

〈略歴〉

長崎出身 広島在住

広島県詩人協会会員 詩誌「折々の」同人

●優秀賞

yellow

〈受賞の言葉〉

この度はこのような輝かしい賞をいただき、光栄に思います。

受賞の話を聞いた時驚きで震えました。まさか私の詩が！という気持ちになりましたがそれは間違いでした。

始まりはただの自己満足な詩でした。ノートに詩を書いてそれで満足していましたが、ツイッターで詩を載せている方がいる事に気付き次第に私も載せるようになっていました。書いている詩を

みてもらいたい、自分の詩は読んでもらえる様な詩なのか試したかったです。

最初は、詩っぽいものを載せていました。それでもみてくれる方が増えてきてだんだん「人に見られる」という事を意識しだし、様々な詩のイベントや勉強会、サロンに出たりして、次の様な疑問が浮かぶようになりました。詩とはどういうものか？ 詩を書いて発表する意味は？ どうしてかくのか？ 私が書いているのは本当に詩なのか？ 等本当にいろんな詩人様に詩の事、様々な事を教わりました。

そんな中、今回の賞を知りました。今までは自信がなく、賞に挑戦することを勧められた時私には無理だと思いましたが、これは今まで教わってきたことの恩返しになると考え挑戦しようと決めました。ですので、この賞は今まで関わってくださった皆様のおかげです。

この賞を励みにし、微力ながら詩の世界に貢献出来るよう、更なる努力を重ね、皆様に感動を届けられますよう、精進する所存であります。

改めて、選んでくださった、秋元炯様、田中裕子様、田中眞由美様、根本明様、松村信人様、そして携わっていただいた全ての方々に御礼申し上げます。

〈略歴〉

2020年頃よりツイッター（現X）にて詩を投稿する。

2024年〜2025年同人誌「wonder」にて詩を載せる。

2025同人誌「花」にて詩を載せる。

●優秀賞

芳賀 はが すなは 堇

〈受賞の言葉〉

5年前のコロナでの休校。どうしてこんなに暗い気持ちなのか、小学2年生の私はどんよりしていました。

ただ、そんな時、金子みすゞさんの詩集に出会ったのです。

それは光っていました。言葉一つ一つが星になっ

ていたのです。

あこがれは勝手にわいてきました。

あこがれにのって、私はいつしか詩をかいていました。

そのように、できた私の空をあたたかく見守ってくれる人がいました。

中嶋先生……中嶋先生……私の心に深く刻まれて
います。

先生は、私の詩を読んでくださり、詩をほめてくれました。

それからだんだん詩は、自分の心の鏡へと
なっていきました。

私は詩で全ての事を表現したいです。

この賞を心の明かりにして、これからの未知（みち）を歩いていきたいです。

このたびは誠にありがとうございました。

（中嶋先生は、小学校1年生と2年生のときの担任の先生です。私の詩を認めてくださり、「コンクールに出してみたら？」とやさしく背中を押し

てくださいました。その後に出会った先生方も、応援してくれました。ふり返ると、私は本当に素敵な学校に通っていたのだと思います。）

〈略歴〉

国府台女子学院小学部・中学部に在籍。

令和3年、市川コルトンプラザ「谷川俊太郎いま生きているということ」詩のコンクール 佳作受賞。

同年、第12回「あなたに会いたくて生まれてきた」詩コンクール 最優秀賞（宗左近賞）『かがみのむこう』。

令和4年、第23回市川手児奈文学賞 詩部門 秀逸『ひかげぼっこ』。

令和5年、第14回同コンクール 最優秀賞（宗左近賞）『大きな池と小さな世界』。

令和6年、第15回同コンクール 最優秀賞（みずかみかずよ賞）『おかえり』。

令和7年、第25回市川手児奈文学賞 詩部門 大賞『トビウオだよ飛びたかったよ』。

同年、第4回丸山薫「帆・ランプ・鷗」賞優秀賞』な
んで今』。

作品公募の概要

田中眞由美

日本詩人クラブは、全国から幅広く作品を公募することで詩文化の普及発展に寄与したいと、2017年に新しい詩人の発掘を目的とした「新しい詩の声」賞を創設しました。応募対象は日本詩人クラブの会員ではない方（会友は応募対象）で、今年度で9回目になります。

今回も北海道から沖縄まで幅広い地域から、169名の応募がありました。年齢層も幅広く、最年少は11歳、最高齢は93歳の方でした。

応募作品の中から、最優秀賞1篇と優秀賞2篇、さらに斬新な10代の作品1篇をジュニア賞（賞状のみ）として選びました。贈呈式で賞状・賞金を贈呈し、その様子はYouTubeでも発信します。また、日本詩人クラブのホームページと会報「詩

界通信」に、公募状況と受賞作品、選考経過、贈呈式の模様等を掲載します。応募くださった作品については、受賞者以外の全員の方に、選考委員五人が分担して選考委員のコメントをお送りする予定です。お読みいただき、今後の創作活動に活かしていただければと思います。

選考経過報告

田中眞由美

選考委員は、秋元炯、田中裕子、田中眞由美（委員長）、根本明、松村信人の5名。（五十音順）
まず一次選考で169名の作品から各委員が3月20日（木）を締切日に、4作品を推薦しました。その結果、予備選考通過作品は次の18作品でした。

Yellow 「春の身体」

小田涼子 「何度でも」

笠原有紗子 「フルーツポンチ」

金子詩雨 「蟹気楼の町」

北谷英明 「石」

來生正太郎 「新風」

桑島明大 「東京行き」

琴森 戀 「魂」

佐藤千紘 「見えない地図を進む特別な船」

篠井雄一郎 「美しく光る」

多賀優子 「鳥」

竹野 滴 「人間の部屋」

田中傲岸 「晩照」

中村あさみ 「遠景」

新里 輪 「listen」

福富ぶぶ 「前へ」

松本福広 「点(ほし)」

森下和真 「お布団」

(敬称略・五十音順)

重複して推薦があったのは「listen」(3票)のみでした。この結果をふまえ、18作品からそれぞれが改めて4作品を選び、4月6日(日)に日本詩人クラブ事務所で開催された最終選考委員会に臨みました。

候補の18作品について一篇ずつ丁寧に意見を述べ

べるうち、おおよその作品が絞りこまれたので1人3篇ずつの投票を行いました。結果は「listen」5票、「遠景」5票、「春の身体」1票、「フルーツポンチ」1票、「美しく光る」1票、「鳥」1票、「人間の部屋」1票でした。

ここで5票の2作品について再度確認し最優秀賞は新里輪作品「listen」、優秀賞は中村あさみ作品「遠景」に決定しました。さらに優秀賞を1作品選ぶ投票をしたところ、yellow 作品「春の身体」3票、竹野滴作品「人間の部屋」2票となり、優秀賞は yellow 作品「春の身体」に決定しました。また、独自性がありみずみずしい感性を持つ11歳の芳賀董さんの「夜の三原色」をジュニア賞としました。若い方の作品にも光があたることで、詩の世界が広がることを願います。

選考委員

秋元炯・田中裕子・田中真由美(委員長)・根本明・松村信人